

1-(1) 加工業務用野菜の産地化に向けた取組

—君津地域の豊かな大地を活かす—

活動事例の要旨

君津地域に、従来の市場出荷に代わる加工業務用野菜の契約出荷栽培が拡大している。農業事務所は、その振興に寄与するため、人づくりの観点から生産者の組織活動強化と個別経営体の育成を支援した。その結果、畑地の効率的な利用が進み、個別経営体の規模拡大や販売額の増加も目立っている。

1 活動のねらい・目標

近年、市場向け生食野菜の価格は安値で変動が激しく、例えば君津地域の主力野菜のひとつであるだいこんを、畑全体のまま放棄する事態も見られる。

そのような中で、消費行動の変化から加工業務用野菜のニーズが高まり、全国的に生産が盛んになってきた。君津管内では、以前から生産されているだいこんや、平成17年に一人の生産者が栽培出荷を始めたキャベツも、段ボールやコンテナ出荷から大型の鉄コンテナ中心による出荷形態へと変化している。加えて、販路も加工業者との直接取引が主流になり、栽培者数や面積は大きく拡大した。

改良普及課は、加工業務用野菜に取り組む管内産地の拡大や、個別経営体の所得向上に向けて、支援に取り組んできた。



写真1 キャベツ収穫風景



写真2 だいこん収穫機

2 活動の内容

(1) JAきみつ畑作研究会の活動支援と産地への拡大

管内2JAのひとつである、JAきみつにおける加工業務用野菜の生産の一部を手がける生産者組織がJAきみつ畑作研究会である。現在の会員は18名で、会員の年代は30代7名、40代5名、50代以上6名と比較的若い。主な活動内容は、品種及び肥料農薬実証ほの実践と視察等による情報

収集である。特に、作型別の最適品種を選定するために、だいこんの品種検討は平成 23 年度より 6 年間にわたって継続的に行ってきた。また、キャベツも在ほ性や病害虫に強い品種を選出するために、定期的に品種比較を行った。さらに、平成 30 年度には千葉県野菜品種審査会(キャベツの部)の栽培部門を担当した。

改良普及課は J A きみつ畑作研究会の活動に対して、会員とともに品種目合わせ会や実証ほ検討会で品種の選別と実証ほの評価に対して助言指導した。さらに、とりまとめた資料をその後の栽培講習会等に活用し、産地全体で情報を共有するようにした。

(2) 個別経営体の育成

個別経営体の栽培面積の規模拡大を支援するために、各経営体の労力に合った作業場の環境改善や省力機械の導入に対して助言した。さらに、国庫事業を導入して規模拡大を目指す経営体に対しては、雇用面での問題解決のうえで重要なパート等の導入に関して研修会等を通じて情報提供した。さらに、一部の会員が導入している G A P の取組事例を他の生産者に紹介し、普及を図った。また、法人を希望する経営体に対して、関係機関と連携して設立への支援を行った。

3 活動の成果

(1) 加工業務用野菜産地の拡大

J A きみつにおいて加工業務用野菜として扱われているのが、だいこん、キャベツ、レタス、なばな等である。そのうち、加工業務用だいこんについては、加工専門に数 ha の栽培を行う経営体も現れ、6 年前に比べて栽培面積は倍増した。平成 17 年から栽培が始まった加工業務用キャベツの栽培も年を追うごとに増えた。平成 30 年には君津管内全体で栽培され、栽培者数は 35 人、栽培面積は 60ha まで増加した。特に J A きみつ畑作研究会には、地域の後継者だけでなく、他地域からの新規参入者 4 人も参加しており、平均 7.5ha もの野菜を栽培している。

表 1 J A きみつにおける加工業務用野菜栽培の状況 (一部)

品目	項目	H24	H27	H30
加工業務用 だいこん	栽培者数 (人)	10	20	23
	栽培面積 (ha)	14	21	30
	販売金額 (千円)	74,000	111,000	115,097
加工業務用 キャベツ	栽培者数 (人)	15	24	35
	栽培面積 (ha)	12.7	32	60
	販売金額 (千円)	33,030	83,200	155,232

(2) だいこん、キャベツのは種時期別品種の選定と支援

J Aきみつにおける同品目の栽培品種は、だいこんで約 20 品種、キャベツで約 15 品種あるが、その決定に畑作研究会が実施した実証ほが貢献した。

(3) 個別経営体の変化

ア 畑作研究会員の規模拡大と効率経営の取組

会員 18 名に対してアンケートによる聞き取りをした結果、現状より栽培面積の拡大を希望する会員が 8 名で残りは現状維持であった。会員の中には、だいこんもしくはキャベツを 10ha 単位で栽培している者が 4 名いる。現在 6 名の会員には個別相談を重ね、農地の確保や省力化機械の導入、雇用活用方法の支援を実施している。

イ 省力化機械の導入

省力化機械の開発情報の提供や、先進産地での活用事例を紹介した結果、新「輝け！ちばの園芸」産地支援整備事業等を利用して、全自動定植機 3 台、乗用型ブームスプレーヤー 3 台、だいこん収穫機 3 台、縦型だいこん洗浄機 5 台等の機械が導入され、規模拡大に貢献している。

ウ 作業場改善の実践と G A P の導入

J Aきみつ畑作研究会会員の一人は、面積 379.5 m²もの作業場を建設し、効率的な作業を進めている。さらに、作業動線の改善事例を応用したり、G A P を導入することで、取引先や消費者の信頼を得ている。

エ 法人化の進展

J Aきみつ畑作研究会会員のうち、すでに 2 名が法人化して安定雇用につなげている。その他 3 名も国庫事業による「ちば農業経営相談所」を活用して、法人化に向けた準備を進めている。

4 将来の方向と課題

将来的には、規模拡大を目指す経営体が、近隣の高齢化した農家から借地し、集約した畑で大規模な栽培を進められるよう、関係機関と連携して支援する必要がある。また、栽培面積にかかわらず、個別に築かれている雇用の体系を地域全体で動かせるよう支援する。さらに、今後は加工業務用野菜の一大産地として、現在は畑に限られている加工業務用野菜の栽培が、水田でも可能になるような取り組みを、関係機関の基盤整備部門と進めていく必要がある。

5 担当

北部グループ

6 協力機関

君津市農業協同組合、全国農業協同組合連合会千葉県本部、袖ヶ浦市、農林総合研究センター 東総野菜研究室

